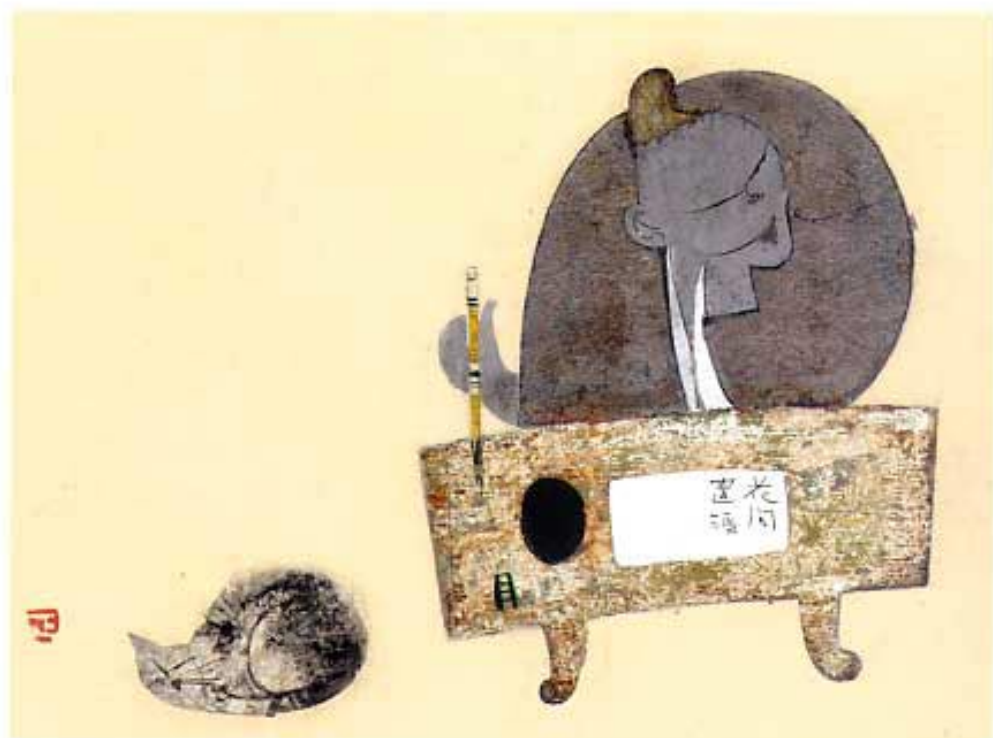


平成19年12月1日発行（毎月1回1日発行）通巻815号  
昭和25年4月3日第三種郵便物認可

# 火星



平成19年12月号

七曜抄

(四)

山尾玉藻

舟降りし脛が紅菘こぼしけり

蹠に水音のある花野かな

ひろげれば大きな袋茸山

茸狩の声ごゑ水へ下り来たる

菊焚ける人消えぬたる湖の晴

池の面を熊手の搔きし松手入

さつきまで竹笠を編んでぬし日向

オニバスに日の溜りぬる十二月

日の丸の傾ぎ蓮の枯れにけり

熊罱の辺りの齒朶のみどりかな

# 太白星

柳生千枝子

清水涌く岩の濡れいろ美しく  
蟬声の冷えて降りくる父母の墓  
香に思ひ出づる人あり菊ひらく  
「新走り入りました」と大書あり  
小菊咲く次々と黄のいろともし  
独り居の耳しんしんと秋深む  
秋雲の何処を指せる早さかな

杉浦典子

鶺鴒仕舞に網目の粗き籠のあり  
陸の鶺鴒の眼ひらきぬ花木槿

カウベルの遠ざかりけり鳥兜  
にぎり飯と水背負ひきし花野かな  
鮭の川乳母車が橋渡りゆく  
水くらく滾りて鮭の遡る  
秋の昼近所の猫に呼ばれたる

浜口高子

崖崩れをりたる際の鳥兜  
初穂田の風に埋もるる仏かな  
耳大きい人と見上ぐる青酸橘  
秋の夜の膝掛に舞ふ赤い鳥  
船頭の法被の袖を月の風  
池の月消えし竜頭船着いて  
けものらの闇音もなし新走り

# 火星作品

## 山尾玉藻選

鉦叩妻にも聞えぬるらしく  
片側のネオン明りの地蔵盆  
戻り来し椅子に温もり後の月  
映画果てし人に躐きぬる秋の暮  
秋霖や軒端に人の香ののこり  
釣糸を垂るる厄日の日本海  
十六夜のテトラポットの睦むなり  
安芸石見分かつ瀬に築崩れけり  
月光の壁を伝うて母の来る  
竹伐つて風呂の焚き口見えにけり  
腋熱くなるまで麦を踏みぬたり  
誰か躓く短日の駅を出て  
くすぶりてそのまま夜へ楯焚火

豊中 廣畑 忠明  
八幡 大山 文子  
京都 白数 康弘

寒鴉日暮に鳴きて安心す  
悪人のふりしてをりぬ葉喰  
須磨浦の砂のこぼるる秋の草  
装束の白きはまりし秋の風  
大鐘のかたへに熟るる山葡萄  
いぼむしり大阪弁に構へけり  
色変へぬ松に沿ひけり宮参り  
赭梨の皮長々と生身魂  
回廊は湖に尽きたり小望月  
奉書紙のもとより白し月の膳  
匣籠紙をかぶせて置かれあり  
七草の秋の余白を肯へり  
さそり座の尾の触れてゐる糸瓜棚  
青蘆原みづ搔くさまにわたりけり  
月あかり満つからつぼの物理室  
地震あとの空の青さに小鳥くる  
夫の背に軟膏を塗るすいつちよん

明石戸栗末廣

神戸深澤鱻

八幡丸山照子

# 選のあとに

山尾 玉藻

鉦叩妻にも聞えゐるらしく

廣畑 忠明

「言葉はやさしくところは深く」の俳句の鉄則を踏み、あくまでも平明である。但し、豊かな対話性が無限の力となつて、静かな感銘が漣のように寄せてくる。芭蕉の「発句は頭よりすらすらといいくだし来るを上品（じようほん）とす」を想起させる。同時発表の〈映画果てし人に躑ぎゐる秋の暮〉のころも深く、これもこの作者特有の滋味ある作品となつてゐる。

月光の壁を伝うて母の来る

大山 文子

掲句も、言葉に銜いがなくところは深い。月の力を有り難く頂戴しながら、慌てず騒がず生きておられる老齡のお母さまの姿に、大きな存在感がある。また、同時発表作〈竹伐つて風呂の焚き口見えにけり〉の趣向の無さにも注目した。変に凝つていないところが、自ずと言外の広がりを生んだ。

腋熱くなるまで麦を踏みみたり

白敷 康弘

まだ凍ての厳しい中で「麦踏」は単純な作業であるだけに、大変辛く根気を要するものだろう。それだけに傍目には寂しげな景に映る。「腋熱くなるまで」は、黙々と同じ行為を繰り返す人の真の実感であり、読み手をも納得させる説得力がある。肉体の中で「腋」ほど昏く、淋しいところはない。

この抒情、貴重である。

いぼむしり大阪弁に構へけり

戸栗 末廣

一読しておかしいが、理屈はない。「いぼむしり」の一瞬の景を切り取り、諧謔のこころを感じさせる。「大阪弁」「構へる」の言葉の機能や象徴力を充分に心得ている所以。

囿籠紙をかぶせて置かれあり

深澤 鱧

実景そのままに充分な詩情がある。詩人の眼で生活していれば、こう言った景色を逃さない。紙一枚で自然界と断絶された籠の中の鳥は、何を思うのであろうか。哀れさがつのる。

青蘆原みづ搔くさまにわたりけり

丸山 照子

「みづ搔くさまにわたりけり」の発見に実感があり、「青蘆原」の世界の本質をそれとなく擲んでいる。この力みのない氣息が、この作者の作品の特性でもある。

馬が呑みし盃に戻る月明り

河崎 尚子

無論、「馬が呑みし」には水が省略されている。馬の口が離れた盃の水面に、静かに月明が戻ってゆく。恐らく形が歪み凸凹な盃に違いないが、それだけに印象的な月明りである。（以下略）



# 恒星圈

同人 I

岡 和絵

飯塚 糸子

かりがねや両の手すすぐ五十鈴川  
秋蝶や燈台までの轍跡  
クラークの像の影なる草の花  
黒染に百万遍の大西日  
妹の耳大きかり花千草

大山 文子

電線の撓みの下の葦の青  
宵闇の風音なりし観覧車  
かまつかを曲つて来たる霊柩車  
築崩れ記憶の父の丸眼鏡  
下り築一両電車通りけり

加藤 君子

鳳仙花あつと言ふ間に別れけり  
片付けし机上に秋の没り日あり  
ハミングのほどの仕事を秋の風  
初嵐やさしく過ぎてくれました  
秋時雨打ち水が程ぬらしけり

米澤 光子

窓開けて銀河の風と思ひけり  
鬼灯や犬をいつびき預かりぬ  
薬袋の片耳抓む月の夜  
待宵や竹の翁はシャツ召され  
色づきし菱に棹さし月見舟

桐の実の鳴りさうな夜を寝ねずをり  
掃出し窓より秋海棠の見えぬたり  
棗の実ひとり住まひの庭にあり  
萩揺るる白毫寺への磴登る  
赤のまま郵便局へ急ぎをり

# 獅子座

山尾玉藻推薦

竹内水穂

蘭定かず子

南浦輝子

新涼や息かけて拭く姫鏡台  
雨ごもるすきとほるまで冬瓜煮て  
架け替へし橋の木の香や沢枯梗  
しろがねの魚に刃を当つ神無月

長田曄子

垣岡暎子

佐保川の秋耀ひぬ通り雨  
ひと言をまだ言はずをり夕花野  
耳すます夫にならひし花野かな  
つげ櫛に髪の瘡せをり水引草

松井倫子

宇賀英二

菊いろに淡く澄みぬし菊の酒  
重陽や相撲童子の尻白き  
重陽やまると濡れぬる土俵跡  
倒木の茸まみれや雨催ひ

湯のやうな水撒いてゐる地藏盆  
荻騒に馴れてきたりし厠窓  
あをみどろ池をなでたる風は秋  
露草の一筋道を御陵まで

台風の余りの風を歩きけり  
オフィスビルの坐像くろがね風の秋  
籐椅子の撓ひ心地の残暑かな  
犬小屋の陰に犬寝る厄日かな

蟬しぐれ石段で見える紙芝居  
夜の秋ひとにぎり炊く無洗米  
とりかぶと錆こぼしぬる大鎖  
露けしや母抱かれのる体重計

つはものの顔白き菊人形  
天高し池にあふるる逆さ富士  
独り身の菊に水足す夜更けかな  
子午線の標準時計鳥渡る